

「国分寺1976」

(2)「国分寺のヒッピーたち」

『国分寺レイディオ』は、国分寺のまち、ひと、自然、歴史などを掘り下げて紹介するポッドキャスト番組です。東京経済大学地域連携センターが制作、運営しています。

こんにちは。ライターの前松佐左衛門です。

「国分寺レイディオ」始まりました。

「国分寺1976」というシリーズの第2回目です。

前回の第1回目は、『国分寺1976』という竹中直人さんの隠れた名曲をめぐる、70年代の国分寺や中央線サブカルチャーについてお話ししました。

今回は、国分寺のヒッピーたちについて話したいと思います。

なぜ、日本で最初のヒッピーたちが国分寺でコミュニンをつくろうとしたのか、彼らはどこでどのように出会い、その後どうなっていったのか、ということです。

それでは最後までお付き合いください。

●「ほびつと村」の誕生

1976年10月、中央線西荻窪駅南口徒歩2分のところにできた「ほびつと村」の話から今回は始めたいと思います。

村といっても、4階建てのビルの1階から3階までの村です。

1階は、有機野菜の八百屋と手作りアクセサリー工房、2階は喫茶店、3階は書店と学びの場となるフリースペースとなっています。

食べ物、居場所、学びの場、などが揃った、まったく新しい都市型コミュニンともいうべき場所です。

「ほびつと村」と名付けたのは、J・R・R・トールキンが書いたホビットの物語からです。ホビットの物語は平和を好むヒッピーたちがよく読んでいたものでした。

この村の初代村長は、60年代末に、国分寺の「部族」というヒッピーコミュニンの中心人物のひとりだった、長本光男(ヒッピー時代の呼び名から、これからナモと呼ぶことにします)さんと、同じく国分寺のヒッピーの中心だった山尾三省(こちらも同様にサンセイと呼びます)さんと一緒に、1階にある有機野菜の八百屋「長本兄弟商会」を始めたばかりでした(兄弟といっても血のつながりではなく志を同じくするブラザーたちといった意味での名付けだそうです)。

この二人の元ヒッピーを軸に、国分寺のヒッピーたちがどこからきて、何をやろうとしたのか、その後はどのように生きていったのかをこれからお話しします。

まずは、この「ほびつと村」の誕生について少し続けたいと思います。

70年代に入り、国分寺のヒッピーコミュニティがうまくいかなかったあと、1975年秋に、アメリカ放浪から帰ってきたナモとインド放浪から帰ってきたサンセイは次の展開を考えます。

それが有機野菜の販売でした。

アメリカを夫婦で放浪し帰ってきたばかりのナモは34歳になり、アメリカ放浪中に生まれた子どももいました。サンセイも36歳になり3人の子どもがいて、次は農業をやろうと考えていました。ナモは、アメリカ放浪中にバークレー（これはアメリカを代表するヒッピーのまちの一つです）で見た有機野菜を扱うヒッピーの八百屋に良い印象を持っていたのです。

70年代半ば頃に、有機野菜の生産や販売をしようとする若者たちが同時多発的に現れます。

「大地を守る会」なども、この頃に事業が立ち上がっています。

1975年時点では、野菜の無農薬栽培と流通の組織的試みはまだほんの少ししかない状況でした。

1975年に大ベストセラーとなった有吉佐和子『複合汚染』という小説の影響は相当の大きさだったのでしょう。

東京だけでなく、この頃の日本中の都市部の川はドブ川で、悪臭がしている状況です。海でとれた魚の内臓から検出されたPCBのニュースもありました。この3年前の1972年には、「水俣病」の医師や患者たちがストックホルムで行われた国連人間環境会議の中で世界にアピールを行い、写真家のユージン・スミスも、水俣の現状を雑誌「ライフ」に発表しています。

60年代の理想主義を生き残った若者たちが、例えば学生運動や三里塚闘争といったフィジカルな政治的闘争をした者も、ヒッピーのような文化的闘争をした者も、理想主義を可能な限り捨てずに生活してゆく手段として、有機野菜販売を選んだのはおもしろいところだと思います。

ナモとサンセイは、最初は中古のトラックを購入して、紹介された茨城県玉造の有機野菜農家（この時点では有機野菜農家はまだ非常に少なかったのです）から仕入れた野菜を国立の

けやき台団地などに売りに行きます。消費者運動が盛んになっていた団地では、無農薬野菜の販売はまだ始まったばかりだったので非常に喜ばれたのです。

試行錯誤を重ねながら少しずつ軌道に乗っていった有機野菜販売は、1976年10月から常設店での販売となりました。西荻窪駅近くのビルを、オーナーの好意で、1階から3階までを借りることができることになり、1階に有機野菜販売の「長本兄弟商会」と手作りアクセサリーの「ジャムハウス」が、2階には喫茶店の「ほんやら洞」、3階には「プラサード書店」と「ほびっと村学校」が入ります。これで、食べ物、居場所、学びの場がそろった、まったく新しい都市型コミュニンが出来上がったのです。

2階の西荻窪「ほんやら洞」をつくった早川正洋さんが「ほびっと」という名前を提案し、みんなで話し合った結果、都会の中に「村」を作り出そうということでこの名前に決めたそうです。

●「ヒッピー」とは何者か

ここからは「ヒッピー」たちがどのように現れていったかについて話したいと思います。

いわゆる「ヒッピー」たちが日本で最初に現れたのは、60年代後半の新宿です。

1960年代の新宿は自由な空気や熱気にあふれ、アナーキーな雰囲気もありました。それをつくりあげていたのは、(特に60年代半ば以降の)学生運動やベトナム反戦活動などの、若者たちによるフィジカルなプロテストの行動の盛り上がりや、アンダーグラウンドから新たに生まれてきた演劇や映画の作り手たちの熱量だったのです。

世界の動きに目を向けると、1968年のフランスの「五月革命」、1960年代半ばからの米国サンフランシスコの「ヒッピー・ムーブメント」、60年代後半に泥沼化してゆくベトナム戦争などの出来事が、メディアの発達によりダイレクトな情報として入ってくるようになったことも重要な背景としてあるでしょう。

「ヒッピー」と呼ばれる、社会からのドロップアウトを自ら選ぶ若者たちと、シンナーを吸ったりしながら日がな一日ぼんやりと過ごす「フーテン」(1969年の映画「男はつらいよ」の主人公フーテンの寅さんの「フーテン」はここからきている言葉ですが放浪者的なニュアンスを持たせてわざと誤った使い方をしています)と呼ばれる若者たちが新宿には同時に現れ混在していました。当時の新宿のまちが持つ自由な空気がこのような若者たちを引き付けたのでしょう。

1960年代半ば、米国サンフランシスコのヘイト・アシュベリー地区に出現したいわゆる「ヒッピー」たちの情報が日本にも入ってきたときに、同じようなことを考えていた若者たちがある者はその本質をとらえ、ある者は流行として、ほぼ同時に反応し素早く行動を起こして

いったのです。

このとき日本のメディアの多くは「ヒッピー」と「フーテン」を同じように扱っていました。

米国の「ヒッピー」たちを紹介するにあたって、まずは当時のアメリカ合衆国の社会状況から説明する必要があります。

60年代半ばのアメリカは、ベトナム戦争の泥沼の中を進んでいました。

これは時代背景として最も重要なことです。

理念がないメンツだけの戦争（東西冷戦のなかでのソビエト連邦との代理戦争という側面です）、そして自分たちが兵士として死んでゆくだけでなく、罪のないベトナムの人々を殺さなければならないという現実に対して、大学生を中心に激しい反戦運動が巻き起こります。アメリカ合衆国はこの時点で男性は国民皆徴兵制ですから、18歳6か月以上であれば2年間の兵役義務があるため、大学生にとっては深刻な問題です。良心的兵役拒否をすればすぐに収監されることとなります。このため、経済的に余裕があれば、カナダやスウェーデンなどに逃れるといった方法を取る者も現れています。ちなみに、ベトナムで死んでいったアメリカの若者たちの多くは黒人や貧しい家庭の者たちでした。

ベトナム反戦運動の広がり、公民権運動（アフリカ系アメリカ人の公民権適用と人種差別撤廃を求めた運動）、女性の権利運動、環境保護運動などとも結びついて、60年代後半のアメリカのプロテスト運動の大きな潮流となってゆきました。

それは、フォークやロック、ソウルといったポピュラー音楽、そして映画（アメリカン・ニューシネマ。「俺たちに明日はない」1967年、「イージー・ライダー」1969年など）などにも大きな影響を与えるものでした。

変化を求めるプロテスト運動が力を得てゆくと、古い体制を維持しようとする人々との分断は広がってゆき、軋轢は様々なかたちで噴出してゆきます。それは、1968年に続けざまに起こった、マーチン・ルーサー・キング Jr.そしてロバート・ケネディの暗殺といった出来事に現れています。

このような時代状況の中で、自分たちの「敵」に対してのプロテスト行動によって明確な「異議申し立てをする」あるいは「戦う」といったかたちではない行動を起こす若者たちが1960年代中ごろにサンフランシスコのヘイト・アシュベリー地区に現れます。のちに「ヒッピー」と呼ばれることになる若者たちです。

明確なプロテストではない、「心の解放」といったわかりにくくとらえどころのない考え方や外見の奇妙さ（長髪と髭、ヘアバンド、サイケデリックな色彩や花柄などの服、フォークロアなアクセサリー、ジーンズなど）に、マスメディアもどのように扱えばよいのか戸惑います。このため、若者たちの一時的で変わった風俗としてメディアは紹介したために、様々な誤解が生じてゆきます。例えば、社会からドロップアウトし、所有ということそのものをやめてコ

ミューンをつくろうとする活動の中で、性の関係性についても女性を男性の所有物にしないという考えでの行動について、メディアはフリーセックスと煽情的に取り上げることで誤解が増幅していったということが象徴的ではないかと思います。

「権力と戦ってもその先には何も無いのではないのか」「部分的な改革よりも文明や文化のパラダイムそのものの本質的变化がもはや必要だろう」といったことに感覚的に気づいていた若者たちが、大国間のメンツのためだけに大量殺戮や自然破壊を繰り返すような社会の制度からドロップアウトして、自分たちが気分よく楽しく生きることができる場所を作り出そうとしたこと。それは既成のプロテストによる組織的な抵抗活動とはまったく異なるかたちでオルタナティブな生き方を実践する試みです。

社会や国家を変える(政治的な革命)のではなく、自分たちが変わることによって社会や世界を変えてゆく(文化的な革命)ことを目指した「ヒッピー」たちは、コミュニケーションの実験、LSDなどのドラッグによる新しい感覚の獲得、無料の食料品配布所の運営、サイケデリック・ロック、反戦アピール(武器ではなく花を)などの試みを、サンフランシスコのハイト・アシュベリー地区から行い始めました。それが同世代の若者たちをとらえ、全米にそして先進国を中心とした世界中に急速に広がっていったのです。

「ヒッピー」たちが始めた「ヒューマン・ビーイン」という形での平和運動の集会(詩人、ミュージシャン、アーティストなども登場します)には参加者が増加し続け、全米に広まってゆきます。「ビー・イン」は、ベトナム戦争への反戦デモンストレーションの意味合いも強いものでしたが、その本質は個人の覚醒と変化によって世界を変えることを目指したヒッピーたちによる重要な文化的変革運動でした。

特に、1967年の夏は「サマー・オブ・ラブ」と呼ばれ、ハイト・アシュベリー地区には10万人もの「ヒッピー」たちが集まり社会現象になります。それは、1969年に40万人以上が集まるという信じられない規模で開催された、愛と平和、ベトナム反戦をテーマとする「ウッドストック・フェスティバル」という巨大な「ビー・イン」にもつながってゆくのです。

これらの動きを日本で最初にキャッチしたのは、新宿にあった伝説の喫茶店「風月堂」に集う、50年代のアメリカの「ビート」の影響を受けてドロップアウトをし、放浪を繰り返す若者たちでした。

●「ビート」たち

ここからは、「ヒッピー」のルーツである、アメリカの「ビート」について少し話したいと思います。少し話が込み入りますがついてきていただければと思います。

ビート（ビート・ジェネレーション、ビートニク、ビート族）は辞書ではこのように説明されています。

「現代の物質文明を否定し、既成の社会生活から脱しようとして無軌道な行動をとる若者たち。第二次大戦後、アメリカを中心に現われた」（日本国語大辞典 第二版）

1950年頃から現れたこのような若者たちは、西洋文明を、行き過ぎているあるいは行き詰まっていると感じて強い違和感を持っていました。

第二次大戦後のアメリカの高い経済成長による豊かさの陰で、物質主義が蔓延し、お金がすべてになり、個人の尊厳がなくなってゆくアメリカ合衆国に対して NO をつきつけながら今ここから逃れることがビートたちの目的となります。時代背景にあるのは、「朝鮮戦争」や「マッカーシズム(赤狩り)」（1950年代前半に起こった反共産主義運動。特にかなりの映画人などのメディア関係者が共産主義者とみなされその地位を失うことになる）などです。手段としては、スピリチュアル、東洋文化(仏教とインド)、サイケデリック(ドラッグ)、性の解放(フリーラブ、同性愛の肯定)、ジャズ(アフリカ由来のリズムが思索的なものに変化を遂げていった音楽)などを用いたのです。ジャズの疾走感とアドリブをビートは好みました。

ビートがこれほどまで文化的な力を持つようになったのは、彼らが発表した詩や小説といった文学作品の持つ力が、同時代の若者たちに強い影響を与えたからです。そして、そのうちのいくつかの作品は、半世紀以上が過ぎても私たちに強烈な印象を与えています。特に、ビート詩人の代表ともいえるアレン・ギンズバーグ（1926-1997）が1956年に出版した『吠える(Howl)』はビートの宣言ともいえるべきものでした。言葉の強靭さと猥雑さの強力なイメージによって世界のあらゆるものを破壊しながら同時に抱え込むようなこの詩は発表から66年が過ぎてもあまりにも強烈です。ボブ・ディランはアレン・ギンズバーグから詩の書き方や人生の多くを学んだとのちに語っています。

他にも、ジャック・ケルアック（1922-1969）の『路上(On the Road)』（1957年）や、ウィリアム・バロウズ（1914-1997）の『裸のランチ(The Naked Lunch)』（1959年）などがビートたちの代表作です。

特に、ケルアックの『路上』に描かれた放浪する若者たちの物語は、60年代には、ボブ・ディラン、ジム・モリソン(ドアーズ)、グレートフル・デッド、ジャニス・ジョプリン、パティ・スミスなどのロック・ミュージシャンやヒッピーたちに多大な影響を与えています。例えば、ジャニス・ジョプリンには、「ポケットに『路上』を入れて生まれ育ったテキサスからサンフランシスコまでヒッチハイクでやってきて歌い始めた」といった伝説があります。

「路上」もまた、発表から65年が過ぎた現在でも、求道的に何かを求めながら、ハイウェイを疾走しバカ騒ぎをしながら、旅を続けるビートたちの姿を描いた物語としての魅力を失っていません。

●日本の「ビート」たち

1950年代半ば、アメリカのビートたちと同じものを見て同じことを考えていた日本人がすでにいました。

ナナオサカキ（榊七夫 1923-2008）という、髪を長く伸ばし常にジーンズの短パンを穿き（1960年代以前では異常な姿です）、定職を持たずに日本各地を（のちに世界各地を）放浪しながら生きたビート詩人です。代表作に詩集『犬も歩けば』（1983年）などがあり、日本ではあまり知られていませんが欧米ではかなり有名です。

第二次大戦中に海軍でレーダーの仕事をしていたナナオは、戦後しばらく出版社（改造社）で働きましたが、すぐにやめて放浪の生活に入ります。これ以降はほとんど働かずに基本的に歩きながら放浪生活を送りました。ナナオは博学強記で、6か国語を独力で学び、バッハの曲の譜面を持つような人で、強い意志と人に与える影響力はかなりのものだったようです。

1956年頃、勉強が好きで強い好奇心を持つ都立高校2年生だったナモ（長本光男 1940年～）が、日本のビートのさきがけである33歳のナナオと新宿風月堂で出会ったことから国分寺のヒッピーたちの物語は始まります。

ナナオは、高校生のナモに「学校なんか行かないほうがいいよ。学歴社会や色んな規制に邪魔をされて、本来の自分を見つけられていないんじゃないか」とドロップアウトを勧めます。ナモは高校を休んでお金を持たずに（ここがナナオのアドバイスの最も重要な部分です。お金を持たないということは人に頼らなければならず自分の恥をすべてさらけ出す必要があるからだ）とナモは後のインタビューで話しています）日本全国をヒッチハイクで回り、大学に入学しても1年で中退します。

この出会いと行動を通じて、ナナオとともにナモたちの師匠格であり、当時は日本で仏教を学んでいたゲイリー・スナイダー（1929年～。オリジナル「ビート」文学者のうちのひとり。

1950年代後半から60年代後半まで京都で禅を学んでいました）や生涯の友となった2つ年上のサンセイ（山尾三省 1939年～2007年）、1958年頃からナナオと行動していた2つ年下の詩人ナーガ（長沢哲夫 1942年～）たちと知り合ってゆきます。

20代半ば頃まで、ビートとして10年ほど日本各地を放浪し続けたナモたちは、60年代半ばごろには、ビートの放浪生活に行き詰まりを感じるようになります。この頃、ゲイリーからコミュニケーションをつくってみてはどうか（「一度みんなで自分たちの理想を表現してみてはどうか」）とのアドバイスを受け、40～50人ほどの仲間たちと、1967年に「部族」

というグループをつくり、まず自分たちの考えをまとめた新聞（「部族新聞」）を発行し、続いて、鹿児島・諏訪之瀬島、長野・富士見町、東京・国分寺などでコミュニケーションづくりの実験をすることになりました。

●「部族新聞」

1967年12月に発行された部族新聞は、「部族宣言」から始まります。

冒頭部分を読み上げてみましょう。

部族宣言——ぼくらは宣言しよう。

この国家社会という殻の内にぼくらは、いま一つの、国家とは全く異なった相を支えとした社会を形作りつつある、と。

統治する、或いは統治されるいかなる個人も機関もない、いや「統治」という言葉すら何の用もなさない社会、土から生まれ、土の上に何を建てるわけでもなく、ただ土と共に在り、土に帰ってゆく社会、魂の呼吸そのものである愛と自由と知恵による一人一人の結びつきが支えている社会を、ぼくらは部族社会と呼ぶ。

アメリカ、ヨーロッパ、日本、その他の国々の若い世代の参加によって、何百万人という若い世代の参加によって、静かにあくまでも静かに、しかし確実に多くの部族社会が形作られつつある。

都会に或いは山の中に農村に海辺に島に。

やがて、少なくともここ数十年内に、全世界にわたる部族連合も結成され、ぼくらは国家の消え去るべき運命を見守るだろう。

ぼくらは今一つの道、人類が死に至るべき道ではなく、生き残るべき道を作りつつあるのだ。

（後略）

自分たちを「部族」と名付けた日本の若者たちは、ヘイト・アシュベリーのヒッピーたちと同様にネイティブ・アメリカンの部族を念頭に置いて、西洋文明に対するオルタナティブな道を、文明や文化の原初にもどるようなイメージで示し実践しようとしたのです。

これは、50年代のビートによる、行き過ぎた文明社会に強烈なNOを突き付けながら逃げ出す、抜け出すといったイメージのその先にあるはずのオルタナティブな生き方を、イメージの世界だけでなく、現実的に土地の開墾などから実際に作り出そうとする壮大な実験宣言なのではないかと思います。

この宣言文を書いたのは50年代に高校生だったときにすでに詩人として知られていたナ

ーガ（長沢哲夫 1942年～）でした。

また、サンフランシスコの優れたアンダーグラウンド新聞である「オラクル」に強く影響を受けながら独自の強烈な印象を与えるビジュアルを手掛けたのは、部族の中でもトリックスター的な役割を演じた絵描きのポン（山田塊也）でした。ちなみに、ポンは文章もうまく、「部族」の記録となる2冊の本（「アイ・アム・ヒッピー」（1990年）、「トワイライト・フリークス 黄昏の対抗文化人たち」（2001年））をのちに著すことになります。

部族宣言を載せた部族新聞第1号は、驚くことに手売りだけで1万部を売り切りました。それだけ彼らの考え方に共感する若者たちが多かったのでしょう。

国分寺には当時29歳のサンセイが妻子とともに住んでいました。

1968年5月に、北口にある元旅館のアパート全15室のうち12室分を借りることができたのでここを拠点とします。

一緒に住むことになった30人ほどの若い男女たちは、「髪の毛を長く伸ばし、髭をぼうぼうと生やした男たち、ビーズ玉で作った首飾りや腕輪をつけ、インディアン風の髪バンドや色とりどりの服装をした娘たち」でした。

この国分寺コミュニンは「エメラルド色のそよ風族」（現在からみるとあまりにも時代を感じる名前です）という名前がつけられています。前年には、鹿児島・諏訪之瀬島に「ガジユマルの夢族」が、長野・富士見町の入笠山山中には「雷赤鴉族」が入植していたので、「部族」として3番目のコミュニンになります。

この頃、アメリカでも人の入らない土地に入植し自給自足のコミュニンを作り出そうとする「ヒッピー」たちが急増しています。

他のコミュニンが自然の中での生活を一から作り出すことを目指したのに対して、国分寺が選ばれたのは、今の仕事を続けたいといった事情のある者たちのために都市型のコミュニンをつくらうとしたことが理由としてあったようです。サンセイのように部族のなかでは唯一、妻子とともにコミュニンに入る者もいたわけですから。

また、元旅館の物件がたまたま空いたということがきっかけではありましたが、石器時代から人が住んでいた国分寺の崖線や湧水といった自然の恵みは、「部族」の若者たちにとっても魅力ある場所だったのではないかと思います。

ちなみに、アパートの家賃は6畳一間に二人ずつ住んで5千円、食費は一人あたり月1,500円（当時の物価は現在の約1/8ぐらいでした）だったそうです。食事は当番制で、青果市場から残った野菜を分けてもらったりしながら工夫してやりくりしていたようです。

それでも、1968年5月から始まった国分寺の「部族」である「エメラルド色のそよ風族」によるコミュニンの実験は苦難の連続でした。

●「ほら貝」と「部族」の散開

資産の共有や共同生活というコミュニンの理想はすぐに崩れてゆきます。

サンセイやナモなどリーダー格の年長者たちは可能な限りの努力をしました。

しかし、各自がアルバイトなどで稼いだ金は共有のザルに入れ、必要な人が必要な額をそこから取るという、理想主義・性善説に立った運営は、やはり、自律性の高い人だけの集団でない限り無理だったようです。

国分寺の部族のメンバーは定職を持って住んでいる人（美術館の学芸員もいたそうです）や週末だけ来る週末ヒッピーなど様々な人の集まりであり、来るもの拒まずという考えで運営されていました。

サンセイとナモたちは、生活してゆくためには**共同の収入源**が必要だと考え行動します。

九州ラーメンの屋台を国分寺駅北口前に出し結構売れたようですが、地回りのヤクザに目を付けられてやめざるを得なくなります。

サンセイとナモたちは、ここで自分たちの居場所であり生活の糧を稼ぐための喫茶店（カフェ）というアイデアを思いつき、自分たちで内装をすべて作りあげた「ほら貝」という店を1968年9月から始めます。

「ほら貝」は、ヒッピーたちが好んだサイケデリックなロック（ジェファーソン・エアプレイン、ニール・ヤング、ボブ・ディランなど）のレコードをかけていたので、「日本初のロック喫茶」と言われています。「ジャズ喫茶」の出店はこの頃ピークだったのですが、ロックは60年代半ばまでは日本では不良の音楽であり、芸術性の低いものとみなされていたのです。しかし、60年代後半にアートフォームとしての芸術性を高めていったロック音楽を聴く若者は60年代末から飛躍的に増えてゆきます。高円寺の「ムービン」（1970～1973年）など70年頃から各地で作られていった後発のロック喫茶に、「ほら貝」の誕生は大きな影響を与えたようです。

「ほら貝」は、5～6人が交代で働き順番に休暇を取る制度で運営されていました。最初のうちの休暇は1か月でしたがやがて1年となり、積み立てていたわずかなお金を手にアメリカやインドなどへの旅にメンバーは交代で行くこととなります。

70年代に入ると、コミュニンは立ち行かなくなりヒッピーたちは去ってゆきますが、サンセイやナモたちは、コミュニンを出てからも1973年頃まで「ほら貝」で働き続けました。「ほら貝」はかつてのヒッピーたちが旧交を温める場所でもあり、移転を経て2008年まで続けました。

●サンセイ屋久島へ

ここからは、最初にお話しした「ほびつと村」誕生の頃、1976年頃の話に戻したいと思います。

サンセイは、1977年に「長本兄弟商会」と「ほびつと村」が軌道に乗り始めたのを確認してから、ナモに鹿児島・屋久島への入植の意思を伝えます。

1974年に、家族5人での1年間のインド・ネパール放浪から帰って来た時点で、すでに農業を行うことを考えていたのですが、ナモの考えた有機野菜販売が軌道に乗るまでは手伝おうとしたのです。77年にはすでに39歳ですから年齢的に最後のチャンスだと考えたのかもしれませんが。

1959年に早稲田大学に入学したサンセイは、学生活動家として、全学連委員長の唐牛健太郎などと一緒に60年安保闘争のただなかにいました。東大生の樺美智子さんが亡くなった1960年6月15日の国会議事堂前のデモの中にもいたのです。

60年安保闘争は70年安保とは違い労働者も巻き込んだ運動でした。朝鮮戦争を戦っていた1951年以降のアメリカの都合によって日本が再び戦争をする国になることを、終戦からわずか15年しか経っていない中で恐れていた人はかなり多かったのです。このために安保の自動延長を止めることへの共感が広がっていったのです。

しかし、60年安保闘争は、安保条約の継続阻止から岸信介内閣退陣を求める方向に急展開していきます。これにより、岸内閣が事態の混乱の責任を取って退陣することで運動は急速にしぼんでゆきました。

サンセイは、この敗北感や個人を顧みない組織での運動の限界を思い知らされたことなどによって、学生運動から手を引き大学をドロップアウトします。

その2～3年後に結婚して子どもも生まれ、父親の経営する工場で働いたりしますが、なじめず、学習塾で教えたりしながら悶々と過ごす中で、ナナオと出会い、ナモたちと出会って行動してゆくことになったのです。

サンセイが屋久島に入植してからは、隣人の死と残された子どもたちの引き取り、妻の死など苦難の連続でした。

それでも農業を続けながら、自身の思索を、詩やエッセイとして発表してゆきます。

最初の著作である「聖老人 百姓・詩人・信仰者として」（1981年）には、かなりの分量を割いて、「部族」や「長本兄弟商会」のことが描かれています。

サンセイにとっては、「部族」や「長本兄弟商会」は自分の原点であり、後半生の農業と思索は

自身の存在の発露そのものだったのです。

多くの優れた著作物を残したサンセイは、2001年に62歳で亡くなりました。

●「部族」の残したもの

「部族」が行ったコミューンの実験は短い時間で終わりを告げました。

しかし、彼らが示したもや残したものは、50年代にビートたちが考え文字に表したことの本質的理解であり、60年代のヘイト・アシュベリーのヒッピーたちと同じ、その発展的継承でした。

1950年代半ばの新宿・風月堂でのナオとナモたちの出会いから始まった「部族」の旅は、次のステージとして60年代後半の部族新聞の発表とコミューン作りの実践への取り組みとなります。

しかし、ナモやサンセイたちの努力にもかかわらず国分寺のコミューンは3年ほどで潰えました。

それでもゲーリー・スナイダーやアレン・ギンズバーグなどのビートたちからビートの本質を直接受け継いだ彼らは、コミューンという実験がうまくゆかなくても、次の方法を考え、場所を見つけ、そして表現し続けていったのです。

「ほびつと村」はその結実であり、安全な食べ物（長本兄弟商会）、集える場所（ほんやら洞）、学び発表する場所（ほびつと村学校 ナワプラサード書店）がそろった場所は、ビートあるいはヒッピーたちが考えたような疑問や違和感を持って生活している人々にとっては大事な場所になっていったのです。また、都市のヒッピー・コミュニティとしてのショーケースになったのではないかと思います。

「長本兄弟商会」と2階の「バルタザール」（「ほんやら洞」は「満月洞」と名前を変え現在はこの名前になっています）はナモさんの子どもたちが現在は引き継いでいます。

ナモさんは、2020年2月まではウェ이터として店に出ていて、店に飾っているアレン・ギンズバーグから贈られたビートたちの写真を説明してくれたこともありました。

YouTube で検索すると「ほびつと村学校」でナモさんが自身の半生について話している映像を見ることができます。

ナモやサンセイが考え実践したことを私たちはどのようにとらえればよいのでしょうか。

日本で最初の「ヒッピー」たちの理想や実験の多くは続けていくことができませんでした。

「ヒッピー」たちが実現しようとした理想やビジョンの多くは資本に取り込まれています。

現在、高級スーパーには有機野菜が当たり前のように置かれ、長本兄弟商会とほぼ同じ時期に設立された大地を守る会は富裕層が利用する大組織となっています。

60年代後半にサイケデリックを取り入れながらアートフォームとして深化していったロック音楽は、70年代以降は巨大な富をもたらす手段になりました。

また、そのサイケデリックなイメージを表出するための手段としてのパーソナル・コンピュータの夢がどのように資本そのものになってしまったかについては説明の必要もないでしょう（アップル・コンピュータの創設者であるスティーブ・ジョブズは、70年代初めに大学をドロップアウトして禅を学び、インドに向かった若者でした）。

1950年代のビート、そして60年代のヒッピーたちが考え、実践しようとしたことは、21世紀の現在こそ再び考えなければならないことだと思います。

行き過ぎた文明は、もはや部分的にでも後戻りをしなければ破滅するところまで追いつめられているように感じます。半世紀前よりも現状は深刻です。

また、行き過ぎた資本主義は、貧富の差を拡大させ過ぎました。富の再配分や共通資産について提唱する知識人も多くなっています。

60年代にヒッピーたちが考えた実験は極端過ぎる理想主義だったかもしれません。しかし、その意味や価値を私たちはもう一度考え直す必要があると思います。

国分寺に1968年から3年ほど存在した「部族」が考えたこととコミュニンの実験がその後何をもたらしていったかを説明するためにここまで長々と話してきました。

ご清聴ありがとうございました。

これで「国分寺1976」第2回「国分寺のヒッピーたち」を終了します。

最後までお聴きくださりありがとうございました。

ご意見やご感想などありましたら東京経済大学 地域連携センターまでメールでお願いします。

次回は、第3回「居場所を求めた若者たち」をお届けする予定です。

出演は、ライターの近松佐左衛門でした。

最後までお聴きくださりありがとうございました。

次回もお楽しみに。

「国分寺レイディオ」は、国分寺のまち、ひと、自然、歴史などを掘り下げて紹介するポッドキャスト番組です。東京経済大学地域連携センターが制作、運営しています。

第2回終了

出演：近松佐左衛門

録音：株式会社モジュール

編集：GO ARAI

ジングル作成・BGM 作曲・演奏：GO ARAI

【参考文献】

- 「聖老人 百姓・詩人・信仰者として」山尾三省 野草社 1988年
- 「みんな八百屋になーれ 就職しないで生きるには③」長本光男 晶文社 1982年
- 「アイ・アム・ヒッピー 日本のヒッピー・ムーブメント`60-`90」山田塊也 第三書館 1982年
- 「トワイライト・フリークス 黄昏の対抗文化人たち」山田塊也 ビレッジプレス 2001年
- 「SPECTATOR 第45号 日本のヒッピー・ムーブメント」エディトリアル・パートメント 2019年
- 「につぼんコミュニケーション」アサヒグラフ編 1978年 朝日新聞社
- 「ヒッピーのはじまり」ヘレン・S・ペリー（阿部大樹訳）作品社 2021年
- 「ザ・ヒッピー フラワーチルドレンの反抗と挫折」バートン・H・ウルフ（飯田隆昭訳）
国書刊行会 2012年
- 「オン・ザ・ロード:書物から見るカウンターカルチャーの系譜ービート・ジェネレーション・ブック・カタログ」監修 山路和弘 トゥーヴァージンズ 2021年
- 「ビート・ジェネレーション」諏訪優 紀伊国屋書店 1980年
- 「THIS 特集 Beats Go on」M's Factory 1986年
- 「THIS 特集 BEAT AND HOLY REBELS 抗う天使たち」佐野元春事務所 1995年
- 「ビートニクス コヨーテ、荒れ地を往く」佐野元春 幻冬舎 2007年
- 「吠える その他の詩」アレン・ギンズバーグ（柴田元幸訳）スイッチ・パブリッシング 2020年
- 「アレン・ギンズバーグ」諏訪優 彌生書房 1988年
- 「オン・ザ・ロード」ジャック・ケルアック（青山南訳）河出書房 2010年
- 「地球の家を保つには エコロジーと精神革命」ゲアリー・スナイダー（片桐ユズル訳）スタジオリーフ 1991年
- 「ココペリの足あと」ななおさかき 思潮社 2010年
- 「場所を生きる ゲアリー・スナイダーの世界」山里勝己 山と溪谷社 2006年
- 「銀河系の断片」山尾三省（塚越哲朗編）幻戯書房 2009年
- 「60年代新宿アナザーストーリー タウン誌『新宿プレイマップ』極私的フィールドノート」
本間健彦 社会評論社 2013年
- 「魂のアバンギャルド もう一つの60年代」おおえまさのり 街から社 2013年
- 「ライフスタイルの社会学 対抗文化の行方」渡辺潤 世界思想社 1982年
- 「長沢哲夫詩集 手のひらに 虹の 長い尾羽根が まわっている」長沢哲夫 プラサード書店
1985年
- 「SPECTATOR 第48号 パソコンとヒッピー」エディトリアル・パートメント 2021年
- 「ダイコン1本からの革命 環境 NGO が歩んだ30年」藤田和芳 作品社 2005年

【参考ウェブサイト】

<https://screen-life.jp/lifestory/story/person040/>

<https://www.youtube.com/watch?v=epSr4AIT3aU>

<https://www.youtube.com/watch?v=qj6eh993hLE>

<http://nishiogibiyori.com/eat/2018/11/2099/>

以上